
夢を紡ぐ物語

赤い月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢を紡ぐ物語

【Nコード】

N7163E

【作者名】

赤い月

【あらすじ】

平和だった村、エスレイン。突然ゴブリンが村を襲うようになり、どうしようもなくなってしまう。そこで、村長の下した英断とは？

巻き込まれた騒動（前書き）

ハートフルな冒険物語ですW

巻き込まれた騒動

「さて……どうしたものかの？」

そう呟き、困ったように髭に手を当てる老人。

「もうどうしようもないように思われますが……」

その老人の横で、苦笑しながら答える若い女性。

「いやいや、一つだけこの危機を回避できるかもしれぬ方法があるんじゃないかな？失敗する可能性が高いんじゃないよ」

先程と同じく髭に手を当てたままの老人。

「ふむ、失敗する可能性が……どれくらいですか？」

「うむ、約90%じゃ」

「高っ！」

今、前代未聞の危機に襲われている村、エスレイン

元はとても平和な村だったが、今では週に一度のペースで魔物がや

ってくるようになった。

魔物の目的はわからないが、何の目的もなく週に一度襲ってくるはずがない。

今までは村の自警団や、若い村人のおかげで助かってきたが、そろそろ危険がアブない状態になってきた。

この危機的状態を脱するために、三日に一度のペースで会議が行われているのだが、いかんせん参加するものが村長とその部下、メニア・フェーリネルしかいないため、ほとんど意味がない。

そのため、村は荒れる一方、村人たちはほとんど出て行ってしまった。

もはやこの村に残っているのは、勇気や自身に満ち溢れてる若者や、村から出れないほどに弱った村人だけである。

「……で、その方法とは？」

村長の部下、メニアが尋ねる。

「召喚じゃ」

「召喚？」

「そう、召喚じゃ」

「召喚って……いったい何を？」

不思議そうに首を傾げるメニア。

「英雄じゃよ、こんな状態で召喚するといったら英雄以外にありえないじゃろう?」

「英雄といつても・・・英雄なんて召喚できるのですか?」

やはり不思議そうなメニア。

「だから、失敗する可能性が多いといつとるじゃろうが」

「失敗した場合には何を?」

「うーむ・・・役に立たない犬や猫、運が悪ければ魔物が出てくるじゃろうな」

「全然駄目じゃないですか!」

「しかし、だからといって他に方法があるかの?」

「でも・・・」

悩むように顔を伏せ、メニアは考え始めた。

「それに、魔物が出るのは運が悪ければの話じゃよ、そうそう魔物はないじゃろう」

大丈夫大丈夫、とでもいうかのように手を振る村長。

「ふむ・・・では、やってみますか」

悩んでいたわりには軽いノリできめるメニア。

「このままでは、じきに村は滅ぶしの」

そついい、席を立つ村長。

それにつられて席を立つメニア。

二人は、会議室のドアを開けて外に出て行くのだった・・・召喚の儀をするために必要な道具を持って。

村人達が周りを囲み、心配そうに見守る中、メニアと村長は召喚の準備を着々と進めていた。

魔方阵を書き、供物をささげ、魔道書を開く。

そして、村で一番優秀な魔道士に命令し、印を結ぶ。

「さて、準備は整ったの・・・始めるぞ」

村長はそついい、魔道士に命令をして一歩下がる。

魔道士は頷き、魔法を唱えはじめる。

やはり心配そうに見守る村人、同じく心配そうに見つめるメリア、
万が一のために武器を用意している自警団。

そして、魔道士が呪文を唱え終わった。

その瞬間、辺りを光が包み、激しい音とともに、大地を揺るがした。

激しい土煙の後、魔法陣の中に立っていたものは……5人の少年
少女達であった。

巻き込まれた騒動（後書き）

さてさて、この召喚された五人がどうなるのやらw

降り立つ戦士たち（前書き）

今回はハートフル分が不足しておりますが、ご了承くださいw

降り立つ戦士たち

「……えーっと？」

驚きと落胆が入り混じったような表情で呟くメニア。

「ふむ、成功かのお」

ふおっふおっふお、とでもいうかのように髭に手をあてて老人が笑う。

「成功はいいのですが……この方たちは？」

状況が飲み込めず、困惑している少年たちを見て、メニアが尋ねる。

「だから、英雄じゃよ。といっても、これから英雄になってもらうのじゃがな」

「は？これから英雄に？」

「そうじゃ、やはり本物の英雄たちを召喚するには無理があつてのお、英雄になれそうな人間を連れてくることにしたんじゃ」

「なれそうなくて……何で判断するんですか？」

「素質じゃよ、人間には元々一人一人に特化している部分があるのじゃ」

「はあ……で、何が特化している方を集めたので？」

「それはじゃな、運や、力、向こうの世界では受け入れられない魔力を持ったものたちを集めたのじゃ」

それまでは普通に聞いていたメニアだったが、ある言葉を聞き、疑問がわきあがった。

「向こうの世界？」

老人は頷き、説明を始めた。

「左様、わしらのいるこの世界とは別の世界じゃ」

「異世界ですか・・・なんでまたそんなことを？」

「異世界ならばいなくなっても連れ戻しに来ることがないじゃろう？」

「連れ戻しようが無いですからねえ」

「それに、向こうの世界には自分では気づいていないが、かなりの才能に溢れている人間がいっぱいおるんじゃよ」

「ははあ・・・で、どこの世界からつれてきたのですか？」

「うむ、我々の住む世界から少しだけ進歩し、人間と物言わぬ獣だけの世界になった場所じゃ」

「成程。・・・しかし、大丈夫ですか？」

「なにがじゃ？」

「条約とか、法律とか……」

「まあ、黙っておけばいいじゃろ、こちらとてかなり切羽詰った状態なのだ」

「そんなもんですかねえ……」

「そんなもんじゃよ」

と、老人とメニアがそんな話を繰り広げている横で、突然連れてこられた少年たちはかなり混乱していた。

「おいおい、どこだよここ？」

見るからに活発そうで、赤い髪の毛をした少年、名をレクルード・ヨーサジール

「俺が知るか」

それに返事をしたのは、横に立っていた赤毛の少年とは正反対の印象を受ける、綺麗な銀の髪をした少年、名をエヴィクト・ヨーサジール

「でも、僕たち帰れるのかな？」

臆病そうな黒髪の少年、名をカーリクス・ヨーサジール

「さあ？まあ、なんとかなるような気もするし、大丈夫じゃない？」

と、楽観的に見える少女、名をティスレナ・ヨーサジール

「というか、この周りの奴らは何だ？」

最後に、十人が十人とも振り返るような金の髪の少女、名をシャス
エス・ヨーサジール

「おっと、こっちを忘れてましたね。皆さんはじめまして」

老人と話していたメニアがレクルードたちに気づき、挨拶をする。

すると、5人も警戒は解かないが挨拶を返した。

そして、お互いの自己紹介を済ませると、メニアが説明しだした。

「えっと、貴方達はこの世界とは違う、いわゆる異世界から来たの
よ」

「異世界？」

聞きなれない単語に、エヴィクトが疑問の声を上げる。

「ええ、貴方達は知らないでしょうが、この世にはいくつもの世界
があるの」

「ふーん・・・嘘くさいわねえ」

ティスが言い、周りの4人も同意する。

「大体、異世界とかいう所にどうやって私たちを連れてきたんだ？」
明らかに怪しむ目つきで、シャスが言った。

「まあ、怪しむのも無理は無いけどね・・・じゃあ逆に聞くわよ？
貴方達をどうやってこっちに連れてきたというの？」

「それは・・・気絶させてから連れてきたり・・・」

「貴方達、一瞬でも自分たちが気絶したと思う？」

「・・・」

「それに、今はそんなことを問題にしている場合じゃないのよ。貴
方達が連れてこられた理由は・・・」

そこまでメニアが言った瞬間、村中の鐘が鳴らされた。

その瞬間に勇敢な村人や自警団が、武器を持ち各々の持ち場に着い
た。

「な、なに？」

驚いたカーリクスが、慌てながら聞いた。

「来たわね・・・いつもより早いじゃない。感づいたのかしら」

しかし、メニアはカーリクスの問いに答えない。

「だから、何が来たの？」

「魔物よ・・・醜いゴブリンの群れ」

ゴブリンとは、邪悪な意思を持つ妖精で、家畜や作物を人里から奪い、生計を立てる魔物である。巢は主に洞窟で、コボルドというゴブリンの部下のような生物もいる。

「ゴブリン・・・本では見たことがあるが、まさか本当にいるとは・・・」

と、シャスが言うと、メニアが

「あら、本では残ってたのね、でも、本物のゴブリンはその本よりもずつと醜く、危険な生き物よ」

と言った。

「さて、こんなところでお喋りしている暇は無いわ、武器を持って戦いに行つて頂戴」

と、メニアが言ったのだが、勿論突然こんなことを言われても困惑する。

「戦いにつて・・・どういことだ？」

驚いたレクルードがメニアに聞く。

「そうだ、まだ貴方達に言つてなかつたわね・・・」

「貴方達がこの世界に呼ばれた理由、それは」

「戦つためよ、この村の危機と」

降り立つ戦士たち（後書き）

えーっと、苗字で分かる方がほとんどでしょうが、レクルード達は全員兄妹ですよーw

反撃の狼煙（前書き）

やっぱりハートフル分が不足しておりますw

反撃の狼煙

「冗談じゃない、なんで私たちが戦わないといけないんだ？」

ふざけるな、とでもいつかのような表情のシヤス

「あら、だったら戦わなくてもいいけど、もう戻れないわよ？」

「なに？」

「だって、ここは貴方達の住んでいるところとは違う世界よ？どうやって帰るといふの？」

「・・・後で探ささ」

「あらあら、今ゴブリンが襲撃しにきてるといふのに、後なんてあるのかしら？」

「・・・」

「大丈夫よ、村長が何を考えているのかはわからないけど、あれで意外と頭の切れる人なんだから」

「何が大丈夫なんですか？」

隣で黙って見ていたカーリクスが疑問の声を上げる。

「鈍いわねえ・・・」

呆れたように溜息をつくメニア。

「だから、貴方達は戦うために呼ばれたのよ？戦うために必要な才能を持たない人間を呼ぶと思う？」

「それはそうだけど・・・」

どうも腑に落ちない、といった様子で考えるカーリクス。

「それに、ここで考えてても仕方がないわよ、さあ、私たちの手伝いをしてちょうだい」

メニアはそういうと、5人の腕を引っ張っていった。

当然、抗議の声を上げる5人だったが、無情にも、メニアはその声を無視していった。

「じゃあ、あなたはこの弓と矢ね、それと・・・この帽子」

と、村の武器や防具が保管されている倉庫から、幾つかの道具を持ち出してきたメニアが5人にそれぞれの武器を与える。

「弓と矢って・・・こんなに使ったことないわよ？」

使えるわけがない、と抗議の声を上げるティス。

「僕のだって、こんなものでどうやって戦えばいいの？」

渡された短剣を見て、こちらも抗議するカーリクス。

「まあ、俺は満足だけどな。見るこの剣」

「奇遇だな、俺もだ」

と、エヴィクトとレクルードが渡された剣を見ながら言う。

「でも、俺も盾が欲しかったなー」

レクルードがエヴィクトに渡された盾を見て言い

「お前の剣はでかいんだから、盾なんて持ったら振れなくなるぞ」

と、レクルードの剣を指差してエヴィクトが返した。

「で、私のこれはなんなんだ？見たところ本とローブのようだが？」

渡された本をパラパラと捲りながら言うシヤス。

「ああ、それは魔法書よ、折角持って生まれた才能を使わなくちゃもったいないでしょ？」

「魔法書？」

「ええ、グリモワールとも言っわね。魔力を増大してくれるわよ」

「魔法だなんて・・・それに、増大するといっても使えなければ意味がないだろう?」

「そうよ、だから使える人に渡したの。使い方はもっとじっくり読めば分かるわ」

さあ、行った行ったと言うように、5人の背中を押しして戦場へと送るメニア。

「あ、それと弓は耳を引つ掛けちゃ駄目よー、耳が落ちちゃうからねー」

「あと、短剣は隠れて刺しなさいよー、基本は投げナイフを使うのよー」

と、もう遠く離れたメニアが、大きな声で二人に言う。

「まったく・・・なんで私たちがこんな目に?」

ブツブツと文句を言うティス。

「まあ、いいじゃないか、それよりも・・・」

と、目の前に広がる激戦区を見て、レクルードが言う。

「ああ、それじゃあ・・・」

エヴィクトも頷く。

「行くぞ！」

「オー！」

5人は、激戦区へと走り出した。

反撃の狼煙（後書き）

戦闘を期待していた方々、申し訳ありませんw
次回から戦闘に入りますので、楽しみにしてくださいw
それと、5人に与えられた武器は以下の通りです。

レクルードブロンズソード 大剣と鎧

エヴィクト 〓 ロングソードと盾と鎧

カーリクス 〓 短剣と投げナイフ、目立たない服

ティスレナ 〓 弓と矢、目立たない服

シャスエス 〓 グリモワールとローブ

初戦（前書き）

今回は戦闘です、お楽しみくださいw

初戦

「レクルード！俺は向こうの援護に回る、お前はあっちだ！」

と言い、エヴィクトは押され気味の自警団を援護しに行く。

「任せとけ！カーリクス、ついて来い！」

それにつられ、レクルードも走り出す。さらに・・・

「ええ！？待ってよー」

カーリクスもそれについていく。

「で、私たちはどうする？」

置いていかれたティスとシャスは、どちらに行くかを話し合う。

「ふむ・・・では、あそこにも行くか」

と、シャスが押し返してはいるのだが、戦力が足りず膠着状態に陥っている戦闘区を指差した。

「ええ、いいわよ。あそこなら狙いやすそうだしね」

そして、二人も走り出した。

「大丈夫か？」

と、倒れている青年に声をかけるエヴィクト。

「あ、ああ……しかし、奴ら以前よりも強くなっている……何故だ……」

そこまで言い、青年は気絶した。

「よし、後は任せる」

エヴィクトはそう言い、戦闘に参加した。

「さて、いつちよやってみるか」

担いでいた大剣を下ろし、レクルードが言った。

「うん、じゃあ僕は遠くから援護するよ」

同じように投げナイフを用意し、カーリクスが物陰に隠れた。

「おう、後ろは任せませ！」

レクルードは近くにいたゴブリンに斬りかかった。

「ここなら狙いやすいわね」

崖の上に立つシヤスとティス。

「さて、魔法とやらの使い方は・・・っと」

グリモワールをパラパラと捲りながら、使いやすそうな魔法を探す。

「まずは試し射ちね」

ティスは弓を引き絞り、今にも倒れた人間に襲い掛かろうとしているゴブリンに狙いを定めた。

そして、離す。

瞬間、放たれた一本の矢がゴブリンの胸を貫いた。

「よし、狙ったのは頭だったけど、まあ最初だしこんなもんね」

満足そうにティスが言う。

「さて、使えそうな魔法は・・・これだな」
続いてパラパラと捲る。

「えーっと使い方は・・・なんだ、読むだけか」

シヤスはそういうと、書かれている魔法を読み始めた。

狙いは、先程ティスの打ち抜いたゴブリン。

「ファイアボール！」

シヤスの手から大人の拳大ほどの炎が放たれる。

そして、苦しそうに矢を引き抜こうとしているゴブリンに当たり、爆発した。

炎の玉はゴブリンを包み込み、焼き尽くした。

「ふむ、中々の物をもらったな」

こちらも満足そうにシヤスが言った。

「でりゃあ!」

レクルードが叫び、大剣でゴブリンをなぎ払う。

ゴブリンは聞くに堪えない声を発し、倒れた。

「よっしやあ!」

レクルードが小さくガッツポーズをする。

しかし、その一瞬の隙を別のゴブリンが見逃さなかった。

レクルードに一匹のゴブリンが襲い掛かる。

だが

一本の投げナイフが、それ以上を許さなかった。

ゴブリンの頭にナイフが突き刺さり、崩れ落ちる。

「サンキュー、カーリクス!」

「少しは注意してよ、危ないなあ」

呆れたように、物陰から覗くカーリクスが見えた。

「とっつー！」

掛け声とともに、エヴィクトの剣がゴブリンを切り払った。

グギャア、と、気分の悪くなりそうな声を上げ、ゴブリンの体が崩れ落ちた。

「ちっ、数が多すぎるな・・・」

先程からゴブリンを倒し続けているのだが、一向に数が減らない。

「だが・・・出てくるのならば、切り払うだけだ！」

そういい、エヴィクトは剣を振るう。

しかし、ゴブリンは身軽な動きで避け、反撃を繰り返す。

それをエヴィクトは盾で防ぎ、そのまま盾で押し倒した。

そして、剣を倒れたゴブリンに突き刺す。

そんなことをしばらく続けていたエヴィクトだったが、あるものを見つけた。

それは、前線に出てこないで、仲間に命令をしているゴブリンだった。

勘付いたエヴィクトは、大きな声で自警団に呼びかけた。

「おい！あいつがボスだ！」

エヴィクトがいうと、そのゴブリンはビクリとして、エヴィクトの方を見た。

そして、仲間になにやらを呼びかける。

その瞬間、周りのゴブリンが全てエヴィクトを襲いにきた。

まるで、エヴィクトさえ殺せばこの戦に勝利できる、とでも言うかのように。

「くっ……なんだこいつらは」

急に増えた敵に苦戦しているエヴィクト。

しかし、そこに一つの炎の玉が飛んできた。

そして、今にも襲い掛かってこようとしていたゴブリンを焼き尽くす。

さらに、放たれた矢がその奥のゴブリンの頭を貫いた。

「まったく、苦戦してるんじゃないわよ」

「援護に来たぞ」

崖の上に立つ少女二人に、エヴィクトは返事をした。

「ふん、少し油断しただけだ」

「じゃあ俺たちは援護に来なくてもよかったか？」

エヴィクトが声のした方を向くと、ゴブリンをなぎ倒すレクルードが見えた。

そして、レクルードを襲おうとしたゴブリンの頭に投げナイフが刺さるのも。

「お前らも来たのか・・・」

「ああ、こっちは終わったんでな。それにしても凄い量だ」

ゾロゾロとやってくるゴブリンたちを見て、レクルードが言った。

「そいつらは放っておけ、あの奥にいるのがボスだ」

エヴィクトが指を指した先に、仲間に命令をしているゴブリンがいた。

「了解！」

レクルードはそういうと、そのゴブリンの下へと走っていった。

さらに、上からもそのゴブリン目掛けて炎の玉や弓矢が飛んで行く。

自分が狙われているのに気付いたのか、そのゴブリンは仲間に何か

命令すると、一目散に逃げ出した。

そして、指揮官を失ったゴブリンたちを全滅させるのは、レクルード達には容易い事だった。

「さて、終わったな」

満足そうに伸びをするレクルードが言った。

「ああ、終わった」

やれやれ、やっと終わった。と、エヴィクト。

「感謝なさいよ、エヴィクト」

助けてあげたんだから、と、ティス。

「さあお前ら、私は疲れた。村に戻るぞ」

シヤスはそういい、村へ戻るために歩き出した。

「あ、待ってよー」

カーリクスもそれについていく。

そして、5人は村へと戻るために歩き出した。

初戦（後書き）

いかがだったでしょうか、本日は二回投稿させていただきました、出来れば感想などを残して行ってくださいw

戦士の帰還（前書き）

今回の話は短いですw

戦士の帰還

「お帰りなさい！」

激しい戦いから帰ってきた5人の戦士を迎えたのは、喜びに満ちた顔のメニアだった。

「ただいま・・・ふう」

やっと休める・・・と、5人は座り込んだ。

「あらあら、そんなに疲れたの？」

「ああ、おかげさまでな」

皮肉たっぷりなエヴィクトがいうと、メニアは

「もう、可愛くないわね」

と、怒るような仕草をした。

「で、俺たちはどうやって帰ればいいんだ？」

「あら、ごめんなさいね、私はしらないのよ」

「知らない？・・・なんでだ？」

「だって、呼んだのは村長でしょ？貴方達を帰すにはどうすればいいのかなんて知らないわよ？」

「ええ！？それじゃあ・・・僕たち、どうすればいいの？」

カーリクスは驚き、メニアに聞いた。

「そうねえ・・・村長のところにも行ってみましょうか」

そう言い、メニアは5人を再び立ち上がらせようとする。

疲れ果てた5人は不満の声を上げたが、やはり、聞き入れなかった。

「して、わしのところに来たというわけじゃな」

読みかけの本を閉じ、村長が言う。

「実は、君たちを召喚した魔法は、一方通行なのじゃ」

「一方通行？」

「そうじゃ、本来召喚の儀式は、ゆっくりと時間をかけてからするものなのじゃよ」

「・・・で、ゆっくり時間をかけなかった場合は？」

恐る恐る5人が聞く。

「つまり、先程も言ったように一方通行になってしまっわけじゃな」

「だから、その一方通行ってなんなんだよ！」

5人の中では悟り、諦めた表情の者もいる。

「つまり、君たちは今の状況では帰れん」

村長はハッキリとそういった。

戦士の帰還（後書き）

まさかの3投稿w

エヴィクト達はどっなくなってしまっただろうか？w

準備（前書き）

今回も短いですw

準備

結局、5人はいったん空いている家に泊まることになった。

あの後、現時点では帰れないということ、また襲ってこられる前にこちらから魔物たちの根城を襲うということ、その作戦に参加してもらつことなどを聞いた。

そして、それ以上話していても仕方が無かつたし、何よりも身体の疲労が激しかった。

「まったく・・・ふざけてるよな、あの爺さん」

「やれやれ、と言つかのように、靴を脱ぎベッドに寝そべるレクルー下。」

「全くだ、計画性が全く無いな」

同じく寝そべるエヴィクト。

「でも、三日後にはこっちから攻めていくんだよね？大丈夫かな・・・」

ベッドの感触を楽しみながら言うカーリクス。

「まあ、大丈夫じゃない？今日だって大丈夫だったんだから」

相変わらず楽天的なティス。

「さて、それまでにもっと違う魔法を使えるようにならなければ横になりながらグリモワールを開くシヤス。

「そういえば、そのグリモワールの名前は何なの？」

そんなシヤスを見て、湧き上がった疑問を口にするティス。

「ふむ・・・これの名前か・・・そうだな」

グリモワールを閉じ、しばらく考えるシヤス。

「紅の指導者・・・なんてどうだろうか？」

「いいんじゃない？」

わりとあっさりしているティス。

「決まったな、このグリモワールの名前は紅の指導者だ」

嬉しそうに紅の指導者を見るシヤス。

「さて、そろそろ寝るか、お前らも疲れただろうしな」

そう言って、電気を消そうとするエヴィクト。

「あ、ちょっとまって」

そのエヴィクトを静止し、一冊の日記をバッグから取り出すカーリクス。

「なんだそれは？」

日記を指差し、エヴィクトが聞く。

「見ての通り、日記だよ。こっちで起こったこととかを書くんだ、夢じゃなかったかどうか確認するためにね」

そう言って、書き始めるカーリクス。

「確認する必要が無くなるかもしれんがな」

シヤスが紅の指導者を閉じ、寝る体制になってそう言う。

ほどなくしてカーリクスが書き終わり、5人は就寝した。

そして、残りの二日を各自が好きに過ごした後、ついに討伐隊が派遣された。

準備（後書き）

もう、好きなだけ投稿するぜ！w

今日もう一回投稿すると思うので、お楽しみにw

次回はまたも戦闘でございますw

反撃の時、決着（前書き）

はい、戦闘パートですw
お楽しみくださいw

反撃の時、決着

「さあ、行くわよ」

ティスが合図し、5人は洞窟の中へと入っていった。

残りの討伐隊は、洞窟の外で待機している。

この討伐作戦の概要はこうである。

ティス達が入って魔物を誘き寄せる

適当に暴れたところで引き上げ、ゴブリンを誘き寄せる

出てきたところで討伐隊が待ち構えている

大半のゴブリンを討伐、後はなだれ込んで残党を始末するだけ

「それにしても、そんなにうまくいくのかね？」

考え込むようにレクルードが言う。

「作戦が失敗したのだったら、総力戦にすればいいわ。この作戦は無駄な被害を出さないためのものだしね」

構わず歩き続けるティス。

「でも、俺達は危険なんだろう？全く、何だってこんなことを・・・」

ブツブツと不満をもらすエヴィクト。

「ほらそこ、ブツブツ言わない」

やはり構わず歩くティス。

そんな一行が歩いていくと、開けた場所が見つかった。

さらに、通路の手前で寝ている二匹の生物。

コボルドである。

コボルドとは、犬のような魔物で、ゴブリンの部下のようなものである。

「シート、起こさないようにね・・・僕がナイフを投げるよ」

カーリクスはそういうと、コボルドに狙いを定め、ナイフを投げた。放たれたナイフは見事にコボルドに突き刺さり、一匹の息の根を止めた。

しかし、運悪くもう一匹が目覚め、激しく吠え立てた。

「あちゃー、起こしちゃったか」

「まあ、いいんじゃない？この鳴き声だったら、ゴブリン達だって出てくるでしょ」

ティスの言うとおり、遠くから慌ててこちらに近づいてくる足音が

聞こえてきた。

「よし、もうこいつはいいんだな？新しい魔法の実験台になってもらうとするか」

シヤスはそう言い、紅の指導者を開き魔法を唱え始める。

それに気付いたコボルドが、止めようと走って向かってくる。

だが、シヤスの方が速かった。

「フレイム」

シヤスの手から火炎放射器のごとく炎が噴出する。

「バースト！」

そして、一瞬で炎は速度を何倍にも上げ、より激しく燃え上がった。

その炎に巻き込まれたコボルドは、苦しそうな悲鳴を上げていたが、やがて動かなくなった。

「おー・・・凄いじゃない」

パチパチパチ、と拍手をしながらティスが言う。

「それほどじゃない、というか、さっさと逃げるぞ」

段々大きくなる足音を聞き、シヤスが振り向き走り出した。

それにつられて周りの4人も出口に向かい走り出した。

「くそっ、出口はまだか!？」

走りながらエヴィクトが言った。

「もう少し・・・見えた!」

5人が洞窟から抜け出し、少しすると大量のゴブリンも出てきた。

そして、用意していた討伐隊が襲い掛かる。

あっというまに戦闘が始まり、辺りでは油断していたゴブリンの悲鳴が聞こえてくる。

動揺しているゴブリンほど戦いやすい相手はいない、程無くしてゴブリンは討伐隊によって殲滅された。

「さて、後はあのボス達だけね」

またも洞窟に潜り、歩き出すティス達。

しかし、今度は大量の味方が一緒である。

少し歩いて行くと、またもゴブリンの足音が聞こえた。

どうやら、巢はあまり深くないらしい。

「よし、全員準備をしろ」

声を潜め、レクルードが言う。

「さあ、行くわよー!」

ティスが叫ぶが早いか、一群はゴブリンに向かい突進していった。

しかし、ここで予想外の事が起きた。

ゴブリンの数が予想していたよりも多いのである。

しかし、ここで退くわけにはいかない。

かくして、両軍がついに激突した。

「見つけた！あそこにいるぞ！」

ただのゴブリンは味方に任せ、ゴブリンのボスを探していた5人が、ついに見つけた。

「さあ、恨みをはらさせてもらうぜ！」

レクルードが言い、大剣を構えて襲い掛かる。

「覚悟しろ」

エヴィクトも剣を構え、突撃する。

しかし、二人の攻撃はボスに辿り着く前に叩き落された。

ボスの護衛が、二人の前に立ちはだかる。

体勢を立て直す二人、間髪いれずにレクルードに襲い掛かるゴブリン。

しかし、このゴブリンは一つのミスを犯した。

二人の後ろに立つ人間に気付いていれば、まだ勝機があったかもしれないのに。

レクルードに襲い掛かったゴブリンの頭にナイフが突き刺さった。

さらに、弓矢が胸を貫き、地獄の炎が体を焼き尽くした。

「早く行きなさい！」

そう言われ、レクルードはボスの下へと走り出した。

そのレクルードを止めようと、ゴブリンが襲い掛かる。

だが、その攻撃は盾に受け止められた。

「早く行け！」

エヴィクトがそういうと、レクルードは

「サンキュー、恩にきるぜ！」

といい、また走り出した。

「さあ、お前の相手は俺だ」

エヴィオスに挑発されたゴブリンは、いきり立って襲い掛かった。

「やっと会えたな・・・」

大剣を構え、ゴブリンのボスの前に立つレクルード。

「今度こそ逃がさないぜ！」

そして、襲い掛かった。

それに対して剣で応じるゴブリンのボス。

激しくぶつかり合う剣と剣。

だが、剣同士の戦いならば分はレクルードにあった。

ボスの放った一撃を捻じ伏せ、ボスへと剣を振りかぶる。

しかし、その一撃も止められた。

ボスの隠し持っていた盾によって。

そして、その隙についてボスが剣を振る。

避けるレクルード、しかし、完全には避け切れなかったのか、脇腹からは血が流れ落ちていく。

「ちっ・・・流石ボス、ってところか？」

脇腹に手をやり、流れ出る液体に顔を歪めるレクルード。

「こりゃあ絶体絶命、ってところだな・・・」

またも襲い掛かるうとするボスを見て、レクルードが言う。

だが、その口は笑っている

「俺に仲間がいなかったら、だが」

レクルードが言った瞬間、ボスの背中に短剣が突きたてられた。

悲鳴を上げるボス。

そこに、レクルードが止めの一撃を繰り出した。

反撃の時、決着（後書き）

今日はこれで終わりですw

英雄の帰還、そして出発（前書き）

昨日は更新できずにすみません、今日はちゃんと更新しますよw

英雄の帰還、そして出発

「君達、本当に良くやってくれたの」

素晴らしい、と、村長が言う。

「まさか、ここまでやってくれるとは思いませんでした」

その横でメニアも言った。

「気にするな、放っておけば私達がやられただろっから退治しただけだ」

そうシャスが言い、ティスが

「その代わりに、当然お礼があるんでしょっうね？」

今にも金よこせ、と言わんばかりの笑みで言う。

「ああ、それも考えたんだけどね」

メニアが続ける。

「最終的には、その装備を貴方達に譲るということで決定したわ」

「ちよっ……冗談じゃないわよ！こんなものいいから早くお金を頂戴」

怒りの形相でティスが言う。

「あら、身を守るためにもそれは必要でしょう？まあ、襲われて三途の川渡りの代金にするのならば止めはしないけどね」

余裕そうな顔でメニアが言うので、ティスも諦めた。

「で、私達はこれからどうすればいいんだ？」

シヤスが村長に聞く。

「ふむ……、まず聞くが、君達は家に帰りたいかね？」

「当たり前だ」

「ならば、シュイトゥースに行くが良い」

聞いたことの無い名前に、シヤスは疑問の声を上げる。

「シュイトゥース？何だそれは」

「おっと、知らないのだったな。シュイトゥースというのは、この国でもっとも大きい街じゃ」

「ふむ……そこで何をしろと？」

「シュイトゥースの図書館には無い本が無い、とまで言われておるのではな」

「きつと、本のどれかに君達を返す魔法も載っているじゃろっ」

「成程……で、どの方角にあるんだ？」

「この街から出て、北北東に進んでいくと見えるじゃろう、なんせ大きい街じゃからな」

「分かった、感謝する」

シヤスはお礼の言葉をいい、周りの4人も連れて出て行くこととする。

「おっと、待つんじゃないやお嬢ちゃん」

そう言われ、シヤスが振り返ると飛んできたのは、小銭がギツシリ詰まった袋だった。

シヤスは礼をいい、今度こそ出て行った。

そして、後に残ったのはメニアと村長の二人だけ。

「さて……無事に着ければいいんじゃないかな」

「全くです」

二人は、心配そうにシヤス達を見送った。

英雄の帰還、そして出発（後書き）

さて、お気付きの方もいらっしゃるでしょうが、今回のタイトル「英雄の帰還」は、前回の戦士の帰還とかけているのですw
まあ、だからどうしたって話ですがw

狂気の村（前書き）

さて、ついに5人は村から出て新しい街に向かいます。

狂気の村

「やれやれ・・・随分歩いたかなー」

後ろを振り返り、カーリクスが言う。

「10分も歩いてないわよ、さっさと歩きなさい」

そんなカーリクスに注意するティス。

「えー、もう疲れたよー」

「はいはい、もう少ししたら休憩するから、それまで頑張りなさい」

行った行った、と、手で合図するティス。

そんな一行が歩いていくと、途中で倒れている青年を見つけた。

「おい、大丈夫か？」

エヴィクトが近寄り、肩を揺する。

返事は無い、だが、確認すると息はある。

見ると、腹に小さな傷があった。

エヴィクトは妙に思ったが、そのまま放置するわけにもいかないの
で、仕方なく旅を中断し、キャンプを作り始める一行。

そして、作り終えたころにはすでに日が暮れていた。

テントに入り、村から持ってきていた傷薬や包帯で傷の手当をする。

しかし、一向に回復しているようには見えない。

「おかしい……傷は浅い、それに手当てもした、これ以上すべきことはあるか？」

何ともいえない焦燥感に、イライラしながらシヤスが言う。

「……そうだ、毒じゃない？」

彼女の勘は良く当る、というか、それに気付かなかつたのが不思議なくらいだ。

「そうか、毒か……しかし、毒だったとしたら、私達に打つ手は無いぞ？」

「そうね……近くに村でもあればいいんだけど」

そう言い、ティスは外で見張りをしている男三人に聞いた。

「ねえ、近くに村か何か見えない？」

しかし、今は夜である。

当然、返ってきた答えはこんなに暗いのに見えるわけが無い、だった。

仕方なく、寝て起きたら冷たくなっている、なんてことがないように祈りながら5人は朝になるのを待った。

テントの外が騒がしいので、ティスは眠りから覚めた。

どうやら、カーリクスとシャスは先に起きたようだ、寝袋はカラッポになっていた。

「おはようー」

なんて呑気な事をいいながらティスがテントから出ると、信じられない光景を目にした。

すぐ近くに村があったのだ。

勿論、昨日見落としたわけがない、どこか連れて行ける場所がないかと、辺り一体を探し回ったのだから。

そして、テントのすぐ近くでシャスとカーリクスが話し合っていた。

「だから、昨日見落としただけだっつてば」

「いや、私達は辺りをきちんと探したはずだ」

「偶然見てなかったんだよ」

「それはありえない、大体、こんな近くにあるのならば見落とすわけが無いだろう」

「実際に見落としてあったんだよ、この村が移動してきたとか、生えてきたとでもいうの?」

「そうかもな」

二人がそこまで言うと、テントの中に残っていた二人も出てきた。

そして、案の定近くに出現した村に驚いた。

そして、10分ほど話し合った結果、怪我人をこのままにしておくわけにもいかないので、結局村に連れて行くことになった。

5人が村に入ると、気付いた村人が歓迎の言葉を口にした。

そして、それに気付いた他の村人達も次々に歓迎してきた。

「あらあら、ここの人達は皆親切なのね」

挨拶を返しながらティスが言う。

「何か怪しい気もするが・・・」

何か腑に落ちない、という顔でシヤスが呟いた。

そして、レクルードが怪我人がいることを話すと、村に丁度やってきているという医師の下に連れて行ってくれた。

「はじめまして、私はルツド・ラインフォードといいます」

手を差し出し、にこやかに挨拶するルツド。

差し出された手を取り、5人も自己紹介をした。

「ふむ・・・これは毒ですね、解毒薬があるので心配しなくても大丈夫ですよ」

そう言い、棚から一つの薬品を取り出して青年に飲ませた。

そうすると、いくらかましになったようで、寝息を立て始めた。

「さあ、これでもう大丈夫です」

あっというまに毒を治療してしまったルツドに、5人は礼の言葉を述べた。

「いえいえ、これも仕事ですから」

そついい、また薬品を元の棚に戻すルツド。

その後、他愛の無い話を少しして、ルツドに礼をいい出て行く。

そして、今日は村に泊まることにしたら5人は村の宿に行き、手続きをとった。

夜になり、3人は眠った。

しかし、シヤスとティスは起きていた。

「・・・あら、貴方も起きてるのね」

シヤスが起きているのに気付いたティスが言う。

「ああ・・・ということは、ティスも気付いたのか」

「ええ、あの村人達、危険だわ」

二人が起きているのには分けがある。

村人が自分達と話をした後には邪悪な顔で笑っているのを見たのである。

そして、夜遅く、宿の外から大量の足音が聞こえてきた。

狂気の村（後書き）

近づいてくる足音、眠ってて役に立たない男共。
一体、どうなってしまっのか？

襲い来る魔物（前書き）

狂気の村前編、みたいな感じですよw

襲い来る魔物

「来たな」

シヤスはそういって、魔道書を手に取り呪文を唱え始める。

その間に、ティスは寝ている三人を起こし、今の状況を説明する。

三人は眠気が一気に覚めて、慌てて戦闘の準備を行う。

さらに、先程シヤスとティスで考えた作戦を伝え、三人を配置につかせる。

そんなことをしていると、もうすぐ近くに足音が迫っていた。

窓から外の様子を覗いたシヤスが見たものは、人間の姿を捨て、本来の姿・・・魔物の姿になった村人達だった。

「やはりか・・・だから止めておいたほうがいいと言ったんだ」

愚痴るように呟き、呪文を唱え終わるシヤス。

準備は整った。

目で4人に合図すると、シヤスは火の玉を作り出し、魔物の群れに叩き込んだ。

爆ぜる火の玉、叫び声を上げる魔物達。

そして、自分達の作戦がばれていることを知った魔物達は、叫び声を上げ宿に押し寄せてきた。

しかし、ドアを開けようと近づいた魔物は、一瞬の内に首が飛んだ。同時に、近くにいた魔物に突撃する黒い影。

あまりの速度に反応することが出来ず、あえなく胸に短剣が突き刺さり絶命する魔物。

それに気付いた魔物は、一旦後ろに下がり体勢を整える。

ここから先へは通さない、という様子のカーリクスとレクルード。

かくして、魔物との戦闘が始まった。

カーリクスとレクルードのいる正門の裏側。

そこにも大量の魔物が押し寄せていた。

しかし、こちらにもエヴィクトとティスがいる。

「はあっ!」

掛け声とともに魔物を次々に切り伏せるエヴィクト。

そして、正確に魔物の心臓を貫いていく弓矢。

こちらでも、魔物との戦闘が始まっていた。

「クソッ！これじゃきりが無いぞ！」

魔物を切り払いながらレクルードが言う。

「頑張つて！いくら多いといっても敵の数は無限じゃないはずだよ！」

遠くから投げナイフを突き刺し、怯んだ魔物を短剣で突き刺しているカーリクスが言った。

しかし、あまりの数の多さに捌ききれず、ジリジリと後退させられる二人。

そんな二人の下に、救いの手がやってきた。

上から降り注ぎ、次々に魔物を焼き尽くす炎の玉。

「サンキュー、シャス！」

手を振り、感謝の言葉を口にするレクルード。

窓の上からも、同じように手を振っているのが見えた。

襲い来る魔物（後書き）

次が中編になるか後編になるかは分かりませんw

変貌（前書き）

中編でございます。

変貌

「流石に、数が多すぎるわね・・・」

襲い掛かる魔物を次々に打ち抜き、ティスが言った。

「ああ・・・仕方ないな、例の手を使うしかない」

ニヤリ、と笑い、エヴィクトが言う。

「ええ、そうね」

こちらもニヤリと返すティス。

「そつと決まれば！」

身を翻し、階段と正門に向かってエヴィクトは叫んだ。

「おい！逃げるぞ！」

エヴィクトが言うのと、階段を駆け下りる音と、正門を閉めて急いでこちらに走ってくるレクルードとカーリクスが見えた。

それを確認した二人は、近くの敵を薙ぎ倒し、村の出口を探すために駆けていった。

そして、それに続くように合流した3人も宿から脱出する。

魔物達は慌てて追いかけてしようとするが、炎の壁に遮られ、それも出

来なかった。

「早く行け！」

炎の壁を突き破った魔物たちに追いかけられながら、エヴィクトが叫んだ。

「分かってるよ！」

後ろの魔物に何本かナイフをお見舞いし、走り続けるカーリクスも叫び返した。

と、少しの間必死に逃げていると、一軒の家に灯りが灯っているのが見えた。

そして、そこがルツドの診療所だったことを思い出す。

思わずティスが早く逃げろ、と叫ぶが、聞こえたかどうかは分からない。

そして、何匹かの魔物が立ち止まり、診療所に火を投げ込むのが見えた。

その様子を見て、目を逸らしたくなるティス。

しかし、目を逸らす前に、裏の茂みからルツドが幾つかの薬品と患者を抱えて走っていくのが見えた。

ルツドが助かったことに安心したティスだったが、安心している場合じゃないことに気づき、必死で走る。

そうこうしているうちに、村の出口が見えてきた。

魔物達もそれに気づき、火をつけた槍を投げ、5人の行く手を遮る。

炎のせいで、出口に行くことが出来ず、焦る5人。

迫り来る魔物達。

シヤスが水の魔法も使えるようになっておくんだった・・・と、後悔した時に、それは起きた。

炎に何かの薬品が投げつけられ、あっという間に炎が鎮火された。

そして、炎の消えた先に見えたものは、薬品を投げたルツドの姿だった。

5人が村の外に出ると、魔物達はもう追ってこなくなった。

どうやら、村から出てこれないようだ。

「ありがとう、助かったわ」

ティスが礼を言うと、ルツドは笑い

「なーに、餌を奴らに取られたくなかっただけです」と言った。

その言葉に、とてつもない違和感を覚え、思わず聞き返すティス。

「え？・・・今、なんて？」

「だから、言ったでしょう？」

口元を吊り上げ、ルッドが続ける。

「餌をトラレタクナカッタンデスヨ、ワタシハ」

次の瞬間、突然ルッドの体が裂け、背中に大きな翼を生やした魔物へと変貌を遂げた。

変貌（後書き）

さて、実はルツドは敵でしたとき。

ちなみに、抱えていた怪我人はそこから辺に投げ捨ててあります。

彼は油断させる道具に過ぎなかったのですw

魔族（前書き）

後編です

魔族

「・・・！」

ティスは反応できないでいた。

先程まで味方だと思っていた人間が突然魔物に変身したのだ、無理も無いだろう。

「さて・・・餌になってもらおうか」

背中には羽が生え、ズボン突き破って見えている物は、恐らく尻尾だろう。

尻尾と羽を生やしたルッドは素晴らしい、尻尾を素早くティスに巻きつける。

突然の出来事に、ティスは避けることが出来なかった。

あっという間に捕まり、体を動かすことは出来なくなった。

「ティス！」

シヤスは、紅の指導者を開き、魔法を唱え始める。

「おっと、いいのか？こいつが焼け死ぬことになるが」

尻尾を前に出し、盾にするようにティス突き出す。

「くっ……」

悔しそうに魔法を唱えるのを止めるシヤス。

「ルツド……何故、こんな……」

捕まっているティスは、苦しそうに息を吐きながら言った。

「餌のためだといっただろう？それと、俺の名はルツドじゃない、ルツドという名前は、そこに転がっている人間の名だ」

近くに倒れている青年を指差し魔物が言った。

「お前らがこつも簡単に引つかかってくれるとはな……」

クツクツク、と笑いながら魔物が言う。

「さて、そろそろお喋りは終わりだ」

死ね、と、魔物が4人に襲い掛かってきた。

負けじと、4人も対抗しようとするのだが、力の差が大きすぎる。

「どうした？もう終わりか？」

あっという間に4人は追い詰められる。

「詰まらん……、そうだ、ゲームをしようじゃないか」

いいことを思いついた、と、魔物が言う。

「俺に一発でも攻撃を加えることが出来れば、見逃してやる。」

「だが、お前らが一発食らうごとに少しずつこいつを絞める力を強くする。」

「どうだ？いいゲームだろうか？」

笑いながら、魔物が言う。

「・・・いいだろう。」

エヴィクトが返す。

「エヴィクト！」

「それしか方法はないだろう。」

思わず声を上げるカーリクスに、エヴィクトが言う。

確かに、4人にはそれしか方法が無かった。

「さあ、始めるぞ。」

魔物が言う。

「お前に一太刀浴びせ、ティスを取り返す。」

そう言い、エヴィクトが剣と盾を構える。

そして、斬りかかった。

同時に、シヤスも魔法を唱え始め、カーリクスとレクルードも剣とナイフを構える。

斬りかかったエヴィクトに、魔物が応戦する。

後ろからレクルードが襲い掛かるが、尻尾に薙ぎ払われる。

カーリクスの投げたナイフも、尻尾に全て叩き落された。

「全員目を瞑れ！」

シヤスがそうというと、呪文を唱えた。

「フラッシュ！」

魔物の目の前に閃光が走った。

「なっ……」

直視してしまった魔物は、苦しそうな声を上げる。

「今だ！一発当ててやれ！」

シヤスが言うと、3人は目を開き、魔物に襲い掛かった。

だが、

魔物が一瞬で空高く舞い上がった。

「小癩な真似を・・・」

目を擦りながら魔物が言う。

「だが、お前ら気に入ったぞ、その褒美をくれてやるう」

魔物はそういうと、ティスを空から思い切り地面に向かって投げつけた。

悲鳴を上げながら地面へと向かうティス。

4人は懸命に走るが、間に合いそうに無い。

それでもレクルードが走ると、背中に衝撃と何かが割れる音、体が濡れるのを感じた。

次の瞬間、到底考えられないような速度で落下地点まで走るレクルード。

そして、レクルードが落ちてくるティスを受け止める。

5人が啞然としていると、翼を羽ばたかせながら魔物が言う。

「ちっ・・・止めを刺しておけばよかつたか」

その視線の先には、先程まで倒れていた青年の姿。

そして、その青年は手に何かの薬を持っていた。

「お前ら、運が良かったな」

魔物はそう言うと、かなりの速度で東に飛び去っていった。

5人がまだポカーンとしていると、気絶していた青年……ルッドが歩いてきた。

「助かったようで、何よりです」

ニコリ、と微笑みながら言う。

「……貴方はあいつの仲間じゃないの？」

レクルードに抱えられていたティスだったが、礼をいい降りると、ルッドにそう聞いた。

「冗談じゃありませんよ、あんなものと一緒にされてはルッドが肩を竦める。」

「一つ聞いていいかしら」

「何でしょう」

「貴方は何故あんな場所に倒れていたの？」

「あんな場所と言われても分かりませんが、どうやら毒を盛られていたようですな」

頭がクラクラする、といった様子で頭をさするルッド。

「そう・・・あなたは餌だったのね。私達を釣るための」

「私は知りませんがね」

「まあ、いいわ、貴方のおかげで助かったのだしね、薬の知識が？」

「ええ、まあ少しかじっている程度ですがね」

「まあ、そんなことはどうでもいいが、あんたは何者なんだ？」

横から見ていたレクルードが聞く。

「私ですか？私は、王に仕える騎士ですよ。」

「騎士？王に仕える？・・・とてもそうには見えないぞ？」

確かにその通りだった、ルッドの見た目は精々村の自警団、とでも言ったところだろうか。

「どうやら私の装備や馬は売られたか、食べられたかしたようです
ね・・・、やれやれ、怒られそうです」

「嘘くさいな」

「ああ、嘘くさい」

同意するエヴィクト。

「失礼ですねー」

苦笑するルツド。

「で、王に仕えるって、どこの王様だ？」

「おや、ご存知無いですか？シュイトウースにしか王はいませんが」

「シュイトウース？」

聞いたことがある、と首を傾げるレクルード。

「目的地の名前ぐらい覚えておきなさいよ」

苦笑して、ティスが言う。

「おや、貴方達も行くのですか」

「も、ということとは、貴方も行くのね」

「ええ、なんでしたら着いて行きましょうか？」

「あら、餌として使われている貴方を助けたのは誰だったかしら？」

「ふむ、落ちそうだった貴方を助けたのは誰でしたっけ？」

数秒の沈黙が生まれる。

そして、諦めたようにティスが言う。

「分かったわ、着いてきたいのだったら着いてくればいいじゃない」

「そうしよう」

嬉しそうにルッドが言った。

そして、新しく一人加わった6人は、目的地へ向けてまた歩き出した。

魔族（後書き）

新しく一人加わって、これから街に向かいます。

目的地（前書き）

今回は短いです。

目的地

「あらー、街と聞いてたけど、お城もあったのね」

遠くからとても大きな城を眺めてティスが言う。

「それにしてもでかいな」

ティスの横で同じように眺めてシャスが言う。

「ええ、まさか城下街だったなんてね」

ティスは眺めるのを止め、歩き出す。

「あの城の王様に仕えているんですか？」

カーリクスがルッドに聞く。

「そうですね、私はあの城のエレリック王に仕えています」

ルッドは頷く。

「偉いのか？」

レクルードが聞く。

「そりゃあ、王様ですし」

「違う違う、あんただよ」

「私ですか？私はまだまだ下っ端です」

ルッドは笑って言う。

「でも、騎士って言うんだからそこらの人間よりは偉いんだろうな」

エヴィクトも参加した。

「ええ、とりあえず貴方達よりも偉いのは確かです」

「そんなこといわれても、僕達はこっちに召喚されたばかりだしね」

「おや、貴方達は召喚されたんですか」

「うん、エスレインの村長さんにね」

「ほほう・・・で、何故貴方達が？」

「村長の部下だった女の人は、俺達に才能があったからだって言うてたぜ」

「才能だけに、さいですか、なんちゃって」

「ほら、くだらないこと話してないで、もうすぐそこよ」

ティスが指を指した先には、大きな門があった。

そして、その門の前には二人の門番が立っていた。

「待て、チェックを受けなければこの街に入ることには出来ん」

そう言い、門番はティス達の前に立ちはだかる。

しかし、後ろにいる者に気付いて、態度が急変した。

「おお、ルッドさんでは無いですか、失礼しました、どうぞお通りください」

そう言って、門番はまた門の横に立ち、見張りを再開した。

「……あら、意外と権力あるじゃない」

驚いたようにティスが言う。

「仮にも騎士ですから」

また笑ってルッド達は門の中へと入っていった。

目的地（後書き）

またもや1日更新を開けてしまい、申し訳ないw

城下街

「やれやれ、やっと着いたな」

ふう、と、レクルードが一息ついた。

「ああ、途中の村のせいで長い旅だったように感じるぞ」

その隣でシヤスも言う。

そして、シヤスの言ったことを聞き、ルッドが急にしまった・・・という顔になった。

「どうしたの？」

ルッドの変化に気付き、ティスが聞く。

「いえ・・・、実は私はあの村の調査に向かっていたのですよ」

「あら、そうなの？」

「はい、といっても、実質あの村の調査じゃなくて、あの近辺で行方不明者が続出していたとのことなので、その調査です」

「ふーん、それで？」

「だから、私は調査に向かったんですよ」

「でも、原因も分かったんだし、十分調査した、ってことになるん

「じゃないの？」

「それが、原因を見つけた場合、可能な限り原因を絶て、とのことだったんですよ」

「じゃあ、可能じゃ無かったって事でいいんじゃない？」

「でも、初仕事でそれじゃあ、信用が無くなるでしょう？」

「最初だから大丈夫よ」

「最初だからこそ駄目なんですよ」

「じゃあ、今すぐ戻って原因を絶ちきってくる？止めはしないわよ」

「今からでは体力や精神に多大な負荷がかかるので駄目です、というか、付いてきてくれないんですね」

「だって、もう私に関係ないじゃない？」

「冷たいですね」

そんな話をした後、6人は一旦別々の行動を取ることにした。

ティスは、雑貨屋やアクセサリー等の店に行った。

シヤスは、目的地の図書館へ新しい魔法が無いか探しに行った。

レクルードは、カーリクスと一緒に剣やナイフなどの店に行った。

エヴィクトは、盾がボロボロになったので、新しい盾を買いに行った。

そしてルツドは、結果を報告するために王の下へと向かった。

「それで、報告は以上かい？」

玉座に座り、ルツドの話を聞いていたエレリック王が言った。

「はい、その通りです」

「ふむ……、原因が分かったのはいい事だが、元を断たなければいけない」

そう言い、エレリック王は考えこんだ。

そして、考えが纏まったのか顔を上げる。

「では、ルツド君にもう一度指令をくだそう、もう一度その村に行き、今度こそ原因を断ってきてくれ」

「はい、仰せの通りに」

ルツドはもう一度礼をすると、城から出て行った。

城下街（後書き）

ちなみに、5人は図書館での目的を忘れたわけではありません。ただ、疲れのとれた次の日や、もっと後に捜すことにしたただけなのです。

再戦

「で、何で私達まで手伝わなきゃいけないのよ？」

ブツブツと不満を垂れ流すティス。

「まあまあ、手伝ってくれたら私も元の世界に帰る手伝いをしますから」

そんなティスを見て苦笑するルツド。

「二度目の旅は短かったな、あれのおかげで」

後ろの馬を見て、レクルードが言う。

「うん、帰りも楽しそうだよ」

と、カーリクス。

さて、この6人が今いる場所は、前回何とか脱出出来た狂気の村の手前である。

そこで、最も効率のいい村の滅ぼし方を考えているのである。

「だから、正面突破で良くないか？今度は準備万端だぞ」

レクルードが言う。

「それじゃあ奇襲の意味が無いじゃない」

ちなみに、今は夜中だ。

「じゃあ僕が一人一人刺してこようか」

カーリクスも提案する。

「危険すぎるわよ、起こしてしまったらどうするつもり？」

やはり却下される。

「なあ、あいつらは村から出て来れないんだろ？」

シヤスがエヴィクトに聞く。

「まあ、この前見た限りではそうだったな」

何故か村のすぐ近くにいるエヴィクト達を諦めたような表情で見ていた村人達を思い出す。

「だったら、村ごと焼き払うのはどうだ？」

「ふむ……、奴らが出て来れないのだから有効かもな」

そう言ってエヴィクトは全員に言った。

「今、シヤスの提案で村を丸ごと焼き払えば言いというものが出た」
エヴィクトが続ける。

「俺はこの作戦でいいと思うが、お前らはどうだ？」

周りの4人に聞く。

「ふーん……、楽しいんじゃないの？」

「じゃあ俺も賛成するぞ」

「僕も別にいいよ」

「あ、私も別にそれで構いません」

「なら、この作戦でやるぞ」

そして、シャスが作戦の内容を全員に伝え始めた。

作戦の内容は、とてもシンプルで、中から適当な建物何件かに火をつけ、素早く村から脱出後、生き残った魔物の残滅、ということだ。

「分かったか？」

シャスが聞く。

「ああ、分かった、じゃあ作戦を決行するか」

レクルードが言った。

「じゃあ、私が火をつけてこよう」

そついい、シャスは村の門を潜って歩いていった。

そして、適当な建物を何件か選ぶと魔法を唱え始める。

「ファイアボール！」

まずは一発、普通の民家に。

「もう一発！」

次の炎は前自分達が泊まっていた宿屋に。

「これで最後！」

最後の一発はこの村で一番大きな建物に。

最初の一発が燃え上がり、民家に火がついた。

続けて二つ目も燃え上がり、最後の炎も勢いを増して燃え上がる。

「さて、これでいいな」

シヤスは走って村の門から出て行った。

「これは・・・大惨事だな」

ほとんどの建物が燃えて原型を留めていない。

「巻き起こしたのは私達だが」

生き残っている魔物がいないかと、辺りを見回す。

すると、先の方に人影が見えた。

6人の間に緊張が走る。

そして、その人影が段々こちらに近づいてきた。

弓矢を構えるティス、呪文を唱えるシャスに影に隠れるカーリクス。

そして剣を構えるルッドとエヴィクトとレクルード。

人影はこちらに気付いたのか、段々とこちらに来るスピードが速まってくる。

そして、出て来たのは一匹のゴブリンだった。

すかさず弓を放つティス。

しかし、ゴブリンは大声で仲間を呼んでしまった。

だが、そのゴブリンは先程まで大声を出していたその喉を矢に貫かれ、息絶えた。

途端に辺りがざわめく。

「・・・どうやら、結構な数が残ってるみたいだな」

剣を構えて待ち構えるレクルード。

「ああ、全滅とまでは行かなかつたらしい」

同じく剣を構えるエヴィクト。

「さあ、今まで餌にされていた恨み、晴らさしていただきましょう」

準備万端のルツド。

そんな三人の視線の先には、20匹ほどの魔物の群れが映っていた。

姿を確認したシャスは、炎の玉を撃つ。

魔物の群れに辺り、爆発する炎の玉。

それが開戦の合図だったかのように、魔物達が突撃してくる。

それに負けじと炎や弓、ナイフも飛び、3人も突撃する。

剣と剣がぶつかりあう音、炎の玉が爆ぜる音に、魔物がバタバタと倒れていく音がする。

暗闇の中、暗躍する影も見える。

勝負は、それほど時間をかけずに終わった。

最後の一匹を斬り殺すルツド。

そして、後ろに振り返り、手伝ってくれた5人に言う。

「助かりました、ありがとうございます」

「気にしなくてもいいわよ、こっちも手伝ってもらったから」

「お任せください」

6人は、無事に街へと帰っていった。

再戦（後書き）

明日から旅行に行つて来るので、しばらく続きを書くことが出来ません。

「ふむ、だったらもう行方不明事件は起きないんだね？」

王座に腰掛け、エレリック王が聞く。

「はい、この事件は解決したと見ても間違いないかと」

膝を着き、ルッドが言った。

「よし、よくやった、もう下がっていいよ」

「はい」

そういつてルッドは出て行った。

「それで、褒美とかは貰えなかったの？」

宿のベッドに腰掛けて、ルッドに聞くティス。

「まあ、馬や装備が補充されただけでもありがたいと思わなければ」

苦笑し、ティスに返す。

「意外とケチなのねえ、王様も」

「そんなこと言ってるのと逮捕されるぜ」

レクルードが横から茶々を入れる。

「まあ、そんなことはどうでもいいのよ、とりあえずこの街の図書館に行つて、帰る方法を探さなきゃ」

「同感だな、明日は図書館に行くとするか」

エヴィクトも話に参加する。

「しかし、何を探せばいいんだ？あの図書館では魔法が載ってる本を見かけなかったが」

この城下街に着いて、一人で図書館に行ったシャス、しかし、彼女は魔法について書かれている本を見かけなかった。

「見落としたとかその辺りでしょ？とりあえず行つてみないと」

「では、明日に備えて今日はもう寝ましようか」

ルッドはそういい、レクルード達と部屋へと戻って行く。

「じゃあ、また明日ね」

4人を見送つて、シャスは手を振った。

「へえ、凄く大きいんだね」

図書館を見上げ、感心したようにカーリクスが言う。

その図書館の看板には、大きく「青図書館」と書いてあった。

外見もその名の通り、ほぼ全てが青く塗られていた。

「ここで探し物をするのは、骨が折れそうね」

それに目を痛める、と、ティスが溜息をつく。

「まあ、とりあえず中に入ろうぜ」

レクルードはそう言い、扉を開けて中に入っていった。

「へえ、やっぱり中も広いのね」

レクルードの後ろから着いてきたティスが見回して言う。

内部まで青く塗られており、ティスはもう一度溜息をついた。

「外だけ大きくても意味が無いだろう？俺は本を探しに行ってくる」

エヴィクトはそう言い、目当ての本が無いか探しに行った。

「じゃあ、僕は向こうを探してくるよ」

カーリクスもそういい、エヴィクトの反対方向へと歩いていった。

「じゃあ俺はこっちだ」

レクルードはその二人の反対側、つまり出口へと歩いていった。

しかし、後一步のところでシャスに捕まってしまう。

「こついう本だらけの場所は苦手なんだよ」

「いいから手伝え」

哀れなレクルードは、シャスに奥へと連れて行かれてしまった。

「・・・じゃあ、僕はカーリクス君と探してきますね」

「それなら私はエヴィクトと」

残った二人も、先に行った二人の下へと歩いていった。

「無いわね」

「無いな」

既に三時間程の時間が経過しているが、一向に本を見つけれない
ティスとエヴィクト。

「本当にあるのかしら？ シャスも見つからなかったって言ってたし」

はあ、と、三度目の溜息をつくティス。

「ちょっと他の奴等の所でも見てくるか」

そういい、エヴィクトはカーリクス達の下へと歩き出した。

「そうしましょう」

ティスもそう言って、シャス達の下へと歩き出す。

「また後で」

「ええ、また後で」

「ああもう！ 全く見つからないじゃないか！」

イライラしながらレクルードが言う。

「図書館では静かにしろ、それに、お前は殆ど探してないじゃないか」

シヤスもとてもうんざりした様子だ。

「というか、さっきから料理やら掃除の方法しか載ってない本ばかりなのはどついうことだよ！」

レクルードとシヤスは3時間本を見て回ったのだが、全て魔法のことなど載っておらず、料理や洗濯の仕方など、一般的な本しか見つからなかった。

「それは私の方が聞きたい」

限界になったのか、本を閉じて席を立つシヤス。

「その様子じゃあ見つかってないみたいね、残念だわ」

と、伸びをしているシヤスに声をかけるのは歩いてきたティス。

「つまり、そつちも見つかってないんだな」

ガツカリして、レクルードが言う。

「ええ、本当にこの図書館にあるのかしら？」

「とりあえず私が見た中では魔道書は一つもなかった」

「私もそつよ」

「しかし、俺達で探すよりも職員に聞いたほうが良くないか？」

静寂が流れる。

そして、しばしの静寂の後ティスが口を開いた。

「・・・その発想はなかったわね」

その後、しばらく3人は職員を探し続けた。

「駄目だー、全然見つからないよ」

そこらじゅうの本棚を探し回ったカーリクス達だったが、目当ての本は全く見つからない。

「仕方がないですね、一旦合流しましょうか」

諦めた様子でルツドが言う。

「うん、そうしよう」

カーリクスも頷く。

「では、レクルード君のところにも向かいますよ」

そういい、二人はその場を後にした。

そして、すぐ近くまで来ていたエヴィクトと合流した。

「あの、ちょっとよろしいですか？」

ティスがそこら辺を歩いていた職員に声をかける。

「はい、なんででしょう？」

声をかけられた職員は、礼儀正しく返事をして、ティスの方を向く。

「この図書館に魔道書はありますか？」

そうティスが質問すると、職員は申し訳ない、といった顔になった。

「すみませんが、この図書館には魔道書はないんですよ」

「え？・・・どうしてですか？」

「あー、・・・ご存じ無いですか？」

職員が聞くと、ティスは首を縦に振る。

「この図書館の名前が青図書館だというのは知っていますよね？」

「ええ、知っています」

またティスが頷く。

「この国の図書館には、それぞれ色の名前がついています」

続けて、職員が説明する。

「この街には二つの図書館があり、一つはここ、青図書館です」

「もう一つは、赤図書館と呼ばれる、体術や武器を使った護身方が書かれている本を扱っている所があります」

「この青図書館は、市民の役に立つような、料理、洗濯の豆知識などが書いてある本を扱っています」

「つまり、この街には魔道書について書かれた本は無いのですよ」

「魔道書などを取り扱っている図書館は、魔法都市・・・とでもいいますか、ノークテレスという街にある、白図書館です」

「そうですね、ありがとうございます」

そこまで説明されると、ティスは礼をいってその場を後にした。

戻ってシャスとレクルードに結果を聞かれると、この街には魔道書が無いことと、別の街に魔道書が置いてある図書館があることを話した。

「あの親父・・・、騙しやがったな」

レクルードが怨みのこもった声で言った。

「さあ・・・、知らなかったただけか、それともさっさと出て行って欲しかったのか」

やれやれ、というように、ティスが首を振る。

と、そうやって話していると、カーリクス達3人がやってきた。

その三人にも説明をし、話し合いを始めた。

ただ、話し合いは長く続かなかったが。

結局6人はこの図書館から出て、自分達の宿へと帰還した。

まだ昼間だったが、ヘトヘトになったようで、ベッドに潜り込んで全員眠った。

青図書館（後書き）

お久しぶりです、やっと帰ってきましたw
正確には昨日帰ってきたのですが、疲れていたのものでそのまま眠ってしまいました。

これからは更新出来るので、お楽しみにw

新居

「で、これからどうするんです？」

ルツドが5人に聞く。

「そうねえ……、今すぐ出発ってわけにもいかないし、少しこの街でのんびりしましょうか」

「でも、寝泊りする場所はどつする？まさかこの宿にずっといるってわけじゃないよな？」

「恐らく、この宿に泊まり続けねばすぐに金が尽きるだろうな」

「ええ、そうね」

「……というわけで」

5人がルツドの方を向く。

「……はいはい、狭くてもいいのでしたら、私の家をお貸ししましょう」

やれやれ、というように、首を振ってルツドが言う。

「というか、何で今までルツドの家に行かなかったのかしらね、お金が勿体無いわ」

「私の家を何だと思っているんですか」

苦笑してルツドが言う。

「じゃあ決まりだな、ルツドの家に移動しようか」

一同は頷き、各々の荷物を持って宿を出る。

ルツドを先頭にし、ルツドの家へと向かった。

「はい、ここです」

ルツドが言ったのは、中々豪華な建物だった。

「あら、意外と大きなところね」

「一応騎士ですから」

一同は中に入り、一旦荷物を降ろす。

「へえ、中も中々豪華じゃない」

ティスが感心したような声を上げる。

「あの壺なんか高そうじゃないか？」

レクルードが玄関から見える高価そうな壺を指差していった。

「いえいえ、単なるレプリカですし、そんなものじゃないですよ」

「なーんだ、こっそり売ってお金にしようかと思ったのに」

ガツカリした様子でティスが言う。

「そういうことは持ち主の前で言わないほうがいいですね」

ルッドは苦笑しながら部屋の奥へと進んでいった。

それに続き、一同も荷物を持ってルッドについていった。

奇妙な道

「さて、これからの予定でも決めましょうか」

テーブルを囲って座っている6人。

「そうねえ、私はまたあの図書館にでも行こうかしら、料理の仕方とかも書いてあったし」

他にすることもないしね、と、ティス。

「僕は・・・とりあえず、今日はそこら辺に何かがあるか、とかを見て回ろうかな」

迷うと大変だし、地図も書こう、と、カーリクス。

「俺もそうしようかな、他にやることもないし・・・」

他に面白そうなものがあつたらそっちに行くが、と、レクルード。

「じゃあ俺はこの街にもう一つあるとか言う図書館にでも行くかな」
道が分からないが、と、エヴィクト。

「私はこの家で休むかな、魔道書をもつとジックリと読んでみたい」
新しい呪文でも覚えよう、と、シヤス。

「じゃあ、私もこの家に残りましょうかね、女の子一人じゃ何かと

不安でしょう」

久しぶりの休みだし、と、ルツド。

「別に私のことは気にしなくてもいいが」

「いえ、元々家で休むつもりでしたし」

「これで決定ね、んじゃ、解散ということだ」

そうテイスがいい、イスから立ち上がる。

後の五人も、イスから立ち上がった。

そして、四人は玄関から外に出て行き、二人は家の中に残った。

「ちゃんと、7時までには戻ってくるんですよー」

「母親じゃないんだから」

「いえ、それまでに帰ってこないと、その人の夕食が無くなってしまいます」

「……うーむ、ここはどこだ？」

辺りをキョロキョロと見回して、エヴィクトが呟いた。

どちらを見ても、見覚えの無い道。

既に帰り道すら分からなくなってきた。

しょうがない、そこら辺の人にでも聞こう、と、辺りに聞けそうな人はいないかと探す。

しかし、いくら探しても回りに人が一人もいない。

・・・おかしい

どこに行っても誰一人いない。

いくら人通りの少ない道だったとしても、人間が一人もいない、なんてことはありえないだろう。

そんなことを考えていると、エヴィクトの足元に一匹の犬がやってきた。

「なんだ、お前も迷ったのか？」

そっつい、寄ってきた犬を抱き上げる。

首輪をしていないので、恐らく野良犬だろう。

「やれやれ、一体どこなんだろうな、こっちは」

段々と辺りに霧のようなものが出てきている気もする。

誰に言うともなく、エヴィクトは呟いた。

「そういえば、ルッドが言っていたな、7時までに帰らなければ夕飯は無いと」

エヴィクトは溜息をついた。

「どつやら、今日の夕飯は無しになりそうだ」

そして、また歩き出した。

迷いの小道

「帰ってこないわねえ……」

窓から外を見ているティス。

「道にでも迷ってるんですかね」

料理の後片付けをしながらルツドが言う。

「道が分からないって言うてたしね」

床に寝そべってゴロゴロしているカーリクス。

その横には同じようにゴロゴロしているレクルードの姿も。

「だとしたら、そろそろ探しに行ってやらないといけないんじゃないかな
いか？」

ルツドの後片付けを手伝うシヤス。

「でも、外はもう暗いですよ？探すとしたら明日の早朝にしたほうが
いいんじゃないですかね」

「大丈夫かしら……」

「うーむ、全く分からん」

辺りを見回して、エヴィクトが言う。

「お前は道を知らないのか？」

そう言い、抱いていた犬を下ろす。

「さあ、適当な所に連れて行ってくれ」

さあ行け、と、犬に命令する。

すると、犬はゆっくりと歩き始めた。

エヴィクトも犬と一緒に歩き出す。

そうして、しばらく歩いていくと、一軒の明かりのついた家を見つけた。

そして、先を歩いていた犬がその家の扉の前に座る。

「ん、そこがお前の家か？」

エヴィクトはそういい、その家に近づいていく。

そして、犬を抱き上げるとトントン、と、二回ノックをした。

「ごめんください」

そうして、少し扉の前で待っていると、静かな足音が聞こえた。

足音は段々と近づき、扉の前で止まった。

「・・・なんでしょう？」

扉を開けて出て来たのは、何とも言えない奇妙な格好をした若い女性だった。

「この犬は貴方の犬ですか？」

そついい、抱いている犬を女性に見せる。

「まあ、ルーンじゃない、どこに行ったのかしら」

女性はエヴィクトから犬を受け取る。

「向こうの道で迷っている所を見つけました」

エヴィクトが説明する。

「まあ、それはそれは・・・ありがとございました」

女性は礼をいい、頭を下げる。

「それで、聞きたいことがあるのですが」

「はい、なんでしょう？」

「ここは街のどの辺りでしょうか？」

「あら、道にでも迷われましたか？」

「ちょっと図書館に行こうと思ったのが、運の尽きでした」

はあ、と、溜息をついてエヴィクトが言う。

「ならば、その道を真っ直ぐ行くと、すぐに分かれ道があるので、右に行ってください」

「そうすれば、帰れますよ」

女性はそういうと、別れの挨拶をして家の中に入っていった。

「……とりあえず行ってみるか」

エヴィクトも別れの挨拶をすると、教えられたとおりに道を真っ直ぐ進んだ。

すると、女性の言ったとおりに分かれ道があった。

「えーっと……右だと言っていたな」

分かれ道を右進むと、見慣れた道に出た。

そして、辺りを見回すと、窓から辺りを見ているティスが見えた。

不思議な小道

「あら、帰ってきたわ」

窓から外を眺めていたティス。

その視線の先にはエヴィクトの姿があった。

「おや、帰ってきましたか」

それは良かった、と、ルツド。

「・・・ただいま」

ドアを開き、中に入って疲れた様子で床に座り込むエヴィクト。

「全く、どこに行ったの？」

もうご飯無いわよ、と、ティスが言う。

「俺にもわからん、向かいの道からやっと帰ってこれた」

返事をする気力も無いのか、そっけなく返事をするエヴィクト。

「向かいの道？・・・はて、向かいとはどこですか？」

聞いていたルツドがエヴィクトに聞く。

「向かいと言ったら前だろ、この家の前だ」

面倒くさそうに返事をする。

「変ですねえ、この家の前に道なんて無かったと思いますが」
不思議そうに言うルッド。

しかし、返事は返ってこない。

どうやら力尽きたらしい、エヴィクトはいつの間にか横になって寝息を立てていた。

「・・・明日聞きますか」

やれやれ、と、ルッド。

「じゃあ、とりあえず俺達の部屋に運んでおくぞ」

寝ているエヴィクトを引きずって、自分達の部屋に連れて行くルッド。

ちなみに、この家は二階建てで、一階にはレクルード達三人の部屋と、居間、台所、トイレに風呂、ルッドの部屋がある。

6人が話し合ったりゴロゴロしたりする場所は大抵居間である。

ちなみに台所からも一番近いので、居間で食事をする。

二階には元は空き部屋だったティス達の部屋と、物置がある。

幸いにも布団は朝起きたときと同じ状態だったので、態々布団を敷く必要は無かった。

「ただいま」

エヴィクトを置いてきたレクルードが戻ってくる。

「お帰りなさい」

エヴィクトが帰ってきた後も外を見続けていたティスが返事をする。

そして、ティスは先程まで何気なく見ていた外に、おかしな点が幾つかあるのに気付いた。

エヴィクトは正面から帰ってきたと言った。

事実、自分も正面の道から歩いてくるエヴィクトを見たのだ。

しかし、ルツドは家の前に道など無いという。

それも事実で、今見ても家の前に道など見えない。

（見間違いだったのかしら？・・・まあ、有り得ないとは分かっているんだけどね）

エヴィクトは前から歩いてきた、それは間違いない。

そして、今見える正面の風景は草や木、花などの生えている庭だった。

当然、先には何も無い。

道なんてものもないのだ。

ここまで考えてティスは、この家に最初に来たときの事を思い出そうとした。

自分達が来たときの事を思い出せれば、謎が解けるかもしれない。

しかし、ボンヤリとしか思い出せなかった。

元々、ティスはそんな細かいことを覚えているほど記憶力が良くない。

仕方が無いので、誰か頼れる人間がいないか、ざっと見てみることにした。

レクルードは、自分と同じで記憶力があまり良くなさそうなのでパス。

ルッドは、無かったといっているので聞いても何も得られないだろう。

カーリクスは、地図を作るぐらいだし、期待が出来るかもしれない。

シャスも、魔法を扱うぐらいだし、記憶力はいいだろう。

ティスはカーリクスとシャスに聞いてみることにした。

しかし、シャスはまだ洗い物の途中なので、先にカーリクスに聞く

ことにする。

「ねえ、カーリクス」

暇そうにしているカーリクスに声をかける。

「ん？何？」

「貴方、ここに来たときのこと覚えてない？」

「うーん・・・まあ、少しなら」

「この家の向かい側ってどうなってたかしら？道とかはあった？」

「えーっと・・・」

考え込むカーリクス。

少しすると、思い出したのか顔を上げる。

「確か、道なんて無かったと思うよ」

やっぱりか、と、ティスは思った。

自分の記憶にも、道は無かった。

「そう、ありがとう」

ティスは礼をいい、再び窓へと向かう。

相変わらず、外には道が無かった。

再びボンヤリと考えていると、洗い物が終わったようで、シヤス達が此方に来た。

今度はシヤスに聞いてみることにした。

「シヤス」

「何だ？」

「ここに来たときのことって、覚えていないかしら？」

「何でそんなことを？」

「ちょっと気になったのよ」

「ふむ・・・恐らく、道は無かったぞ」

「あら、良く考えていることが分かったわね」

「誰でも分かる」

「そう？まあ、ありがとう」

やはり、二人とも道は無いといった。

なので、来たときには道は無かったのだ。

(しかし・・・来たときのことがかかってても何の解決にもならなか

ったわね)

やれやれ、と、溜息をついてまた窓から外を眺める。

暫くそのままだったが、夜も更けてきたので寝ることにした。

ルッドやレクルード達におやすみといい、二階の自分達の部屋へと戻っていく。

その途中で、ティスは明日もう一度外に出て、外の調査をしようと考えた。

そのときは、エヴィクトも一緒に連れて行こう、とも考えた。

準備

「朝御飯が出来ましたよー」

一階からルツドが大きな声で言う。

「今行くー」

ティスも大きな声で返事をし、階段へと向かう。

どうやらシヤスは既に食べに行ったようだ。

(さて、今日は外に調査しに行こうかしら)

もう図書館には行ったし、と、ティスが考えながら一階へと降りて行く。

すると、既に5人はテーブルを囲んで、食べ始めていた。

「あら、少しぐらい待っていてもよかつたんじゃない？」

イスに腰掛けながらティスが言う。

「来るのが遅いからですよ」

朝御飯を食べながらルツドが言う。

「そうかしら、結構早く来たと思うんだけど」

ティスは手を合わせていただきます、と言った。

「じゃあまた今日の予定を決めましょうか」

昨日と同じように、ティスが回りに聞く。

「俺は昨日の続きだなー」

まだこの街を回りきってないし、と、レクルード。

「あ、僕もそうするよ」

カーリクスとレクルードは昨日と同じように二人で行動するようだ。

ちなみに、地図の完成具合は10分の1といったところである。

(昨日の出来具合だと・・・地図の完成にはまだしばらくかかりそうね)

少しはゆっくりすればいいのに、とティスは思った。

「じゃあ俺は・・・うーん、どうするかな」

もう図書館に行くのは嫌だ、というようにエヴィクトが言った。

「あ、だったら私と一緒にちょっと調査に行く?」

エヴィクトにティスが言う。

「調査?何の調査だ?」

「ほら、昨日エヴィクトが帰ってきたとき、この家の正面から帰ってきたじゃない。」

でも、この家の正面は草や木があるだけで、道なんて無いの。勿論、エヴィクトの勘違いでも無いわよ、私だって正面から歩いてくる貴方を見つけたし」

「……で、何の調査だ？」

「だから、その不思議な道の調査よ」

「ふむ……、まあ、やることもないし手伝おうか」

やった！と、ティスはガッツポーズをした。

「私も今日は外に出るかな、ティス達についていこう」

少しは運動をしなければ、と、シヤス。

「私は今日も家でゴロゴロしてます」

また夕飯でも作って待ってますよと、ルッドが言う。

「騎士ってそんなもんでいいのか？」

レクルードが不思議そうに言う。

「駄目なんじゃない？」

朝御飯を食べ終えたティスは、早速準備を整えに二階へと向かった。

「・・・気合入ってるね」

意気揚々と二階に向かうティスを尻目に、カーリクスが呟いた。

「じゃあ、また7時までには帰ってくるんですよ」

「分かったわ、それじゃあ行ってくるわね」

ティスが家から出る。

それに続き、シヤスとエヴィクトも外に出た。

「さて、調査なんてどうやってするんだ？」

エヴィクトが聞く。

「そうねえ・・・、大体こういうのの基本は、聞き込み調査だけど」

人に聞くのは面倒くさいわね、とティスが言う。

「だが、どうやって人に聞くんだ？」

今度はシヤスが聞いた。

「うーん、確かに「そこに道が無かったですか？」じゃあ殆ど有用

な情報は手に入らないわね」

考え込むティス。

「まあ、適当に歩きながら考えるか」

良いアイデアも見つかるだろう、とエヴィクトが言う。

そして、3人は歩き始めた。

準備（後書き）

今回の話はあまり面白くなかったと思いますが、まあタイトルの通りに準備の様なものなのでw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7163e/>

夢を紡ぐ物語

2010年10月8日12時21分発行